

■大島義彦先生お別れ会

| | | |
|---------------------------|------------------|------------|
| 葬儀委員長あいさつ | 秋田赤十字病院院長 | 宮下正弘 |
| お別れの言葉山形県副知事 | | |
| 社団法人山形県スポーツ振興21世紀協会理事長 | | 金森義弘 |
| お別れの言葉 | 山形県立保健医療大学学長 | 廣井正彦 |
| お別れの言葉 | 山形大学名誉教授 | 渡辺好博 |
| 弔辞 | 済生会 山形済生病院院長 | 浜崎允 |
| お別れの言葉 | 寒河江市立病院院長 | 佐藤政悦 |
| 大島先生へ送る言葉 | | |
| 山形県立保健医療大学理学療法学科教授 | | 伊藤友一 |
| 大島君を送る言葉 | 新潟大学医学部昭和41年卒同級生 | 斎藤英彦 |
| 大島君を送る言葉 | 新潟大学医学部昭和41年卒同級生 | 木村啓一 |
| お別れのことば | NPOライフサポート協会副理事長 | |
| | 山形大学教育学部助教授 | 浅井武 |
| 大島先生へ送る言葉 | | |
| 元山形大学医学部看護学科地域看護学講座 | | |
| 東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科教授 | | 佐々木明子 |
| 大島先生へ送る言葉 | | |
| 山形県立保健医療大学作業療法学科学生 | | 斉藤寛 |
| 先生から学んだことを生かしてゆきたい | | |
| 山形県立保健医療大学理学療法学科学生 | | 葛西弘典 |
| 先生お世話になりました 医療法人社団悠愛会大島医院 | | 斎藤康子 |
| 大島先生が遺したことを、私達はやっていきます | | |
| | 山形ダッカ友好病院院長 | エクラスル・ラーマン |
| 喪主あいさつ | 医療法人 社団悠愛会理事長 | 大島扶美 |

大島義彦先生
お別れ会

平成十五年九月十四日(日)
セレモニーホール山形にて

略 歴

| | |
|-----------|--------------------------|
| 昭和16年1月2日 | 東京都大田区蒲田に生まれ、長野県へ疎開 |
| 昭和41年3月 | 新潟大学医学部卒業 |
| 昭和48年4月 | 新潟大学医学部助手（整形外科） |
| 昭和53年7月 | 新潟大学医学部附属病院講師（整形外科） |
| 昭和54年7月 | 山形大学医学部助教授（整形外科） |
| 平成8年4月 | 山形大学医学部看護学科教授（地域看護学） |
| 平成9年4月 | 山形県立保健医療短期大学理学療法学科教授、学科長 |
| 平成12年4月 | 山形県立保健医療大学理学療法学科教授、学科長 |
| 平成15年4月 | 医療法人社団悠愛会事務局長 |
| 平成15年9月7日 | 逝去 享年62歳 |

学会及び社会における活動等

| | |
|-------------|--|
| 昭和46年4月 | 日本整形外科学会評議員 |
| 昭和55年12月25日 | 医学博士 |
| 昭和55年4月 | 日本整形外科学会認定医制度委員会委員 |
| 昭和57年4月 | 日本整形外科学会認定医 |
| 昭和62年10月 | 山形県アイスホッケー連盟副会長 |
| 昭和63年4月 | 山形スポーツ医科学研究所副所長 |
| 昭和63年8月 | 日本体育協会公認スポーツドクター |
| 平成5年4月 | 日本整形外科学会認定医試験問題作成選定委員 |
| 平成5年4月 | 高齢者医療研究センター（仮称）整備基本構想基本計画検討委員会委員 |
| 平成6年1月 | 第4回東北脊椎外科研究会主催（評議員） |
| 平成9年7月 | バン格拉デシュに山形ダッカ友好病院設立 |
| 平成10年2月 | 社団法人山形県スポーツ振興21世紀協会理事 |
| 平成11年6月 | 財団法人山形県体育協会医科学委員会委員 |
| 昭和48年から平成7年 | 大島義彦による大島式頸部脊柱管拡大術の開発 大島義彦による悪性腫瘍の脊椎転移への挑戦 |
| 平成14年1月 | 中国での第1回脊椎外科学会にて大島式頸部脊柱管拡大術につき招聘講演。中国に同術式があまねく導入されていることを確認。 |

お別れ会次第

平成15年9月14日

| | |
|---|-----------------|
| 一、開会のあいさつ | 一、お別れの言葉 |
| 一、黙 禱 | 一、弔 電 披 露 |
| 一、葬儀委員長あいさつ | 一、指 名 献 花 |
| 一、略 歴 紹 介 | 一、遺 族 ・ 親 族 献 花 |
| 一、献 奏 | 一、喪 主 あ い さ つ |
| 故人が好んで奏でていた 夜空のトランペット及び ショパンの別れの曲 | 一、閉 式 の あ い さ つ |
| | 一、一 般 参 列 者 献 花 |

お別れ会場（セレモニーホール山形）



故人が栽培した野菜（前日に採取）

葬儀委員長あいさつ

秋田赤十字病院院長 宮 下 正 弘

ただ今ご紹介いただきました、本日の葬儀委員長を務めさせていただきます秋田赤十字病院の宮下です。

台風が心配されたのですが、幸い正面の大島君の写真にあるダッカの空のように、澄んだきれいな青空になりました。大島君が係わるイベントや家族旅行ではいつも天気良かったと、ここへ来る車の中で次男の啓悟君が言ってましたが、台風一過の秋晴れの中で爽やかに、気持ちよくお別れの会をもてることを喜びたいと思います。

さて今日は三連休の真ん中という日にもかかわらず多忙の中を金森副知事様、そして大島君が心血を注いでつくり育て上げたバングラデシュの山形・ダッカ友好病院院長エクラスル・ラーマン様はじめこのように沢山の方々が来て下さり、心より御礼申し上げます。にぎやか大好き、人を集めて熱く語るのが好きな大島君もきっと喜んでいでしょう。

私は昭和41年新潟大学卒業の大島君とは同級生であり、同じ長野県出身と言うこともあって、現在まで40年余にわたるお付き合いをいただいております。そんなことでこの役を仰せつかりました。

さて、私達が大学に入った昭和35年、1960年は60年安保の真只中でした。日本経済は高度成長の坂を登り始め、それに伴う社会の矛盾も出始めていたのです。総資本対総労働の対決と言われた三井三池争議もいよいよ先鋭化しつつあった時期です。そんな時代の中でわれわれは「異議申し立て世代」と言いましょうか、既存の物事に対し「何でそんなのか」、「それでいいのか」と問いかけてゆく思考過程を当然のこととしてきました。60年安保からベトナム戦争、インターン闘争、無給医運動、公害闘争と進み、その中でひたむきにみんなに語りかける大島君は、いつもクラスを中心に居ました。それは政治運動だけでなく、たとえば卑近な例を挙げれば、私の結婚式でも、従来の主任教授に仲人をお願いするのはおかしいのではないか、ここまで育てた父母が末席にいるのもおかしいのではないか、いくら包むなどと腹のさぐり合いもおかしいのではないか、結婚式だけ神頼みなのもおかしいのではないか、等々から大島夫妻が立会人となり、みんなの前で婚姻届に署名する人前結婚式となり、会費制とし、ひな壇は真ん中に我々二人、その両側に大島夫妻、そしてその外側にそれぞれの父母というスタイルとなりました。そんな風に大島君は既存のシステムをうち破り、沢山の新機軸を打ち出していったのであります。大島君はその後新潟大学の整形外科教室、そして昭和54年7月から山形大学整形外科教室に移り、私も57年秋田赤十字病院にとそれぞれ新潟を離れました。会えることも少なくなりましたが、それぞれの地で地方会や研究会がある折には家庭を訪ね、互いの仕事や家族の成長を語り合ったのでした。この後に皆さんから語られると思いますが、山形での彼の働きはめざましいものがありました。私は専ら聞き役でしたが、大いに喝采を送り激励し、時にはハラハラしペースダウンを進言したこともありました。

何時だったか、こんなのを作ったから見てくれ、と山大整形外科同窓会誌第2号を送ってきました。その中に教室で長野県木曾出身の先生が信州人気質について書いていましたが、ま、内容は信州の多くの山は幕府、維新後には政府という時の権力に支配され、それを目の当たりにして信州人は二つのタイプに分かれると。一つは徹底した反骨となり、もう一つは子供を権力側に送り込もうと子女の教育に打ち込む、大島先生は前者のタイプの典型的信州人である、というものでした。言い得て妙であり、また自分も信州人でもあり印象に残っている文章でした。そんな信州人の反骨精神を大島君は年を経ても失うことなく、いわば青年の志を常に胸にたぎらせて生きてきたのではないのでしょうか。ときにちょっとオレは毒気が強すぎるかなー、と反省を洩らすこともありましたが、マ、それに当てられて多少の迷惑を被った向きもあったかもしれませんが、一方で真っ直ぐでリベラルな彼の考えに共鳴し、共に動く仲間がどんどん増えていっているのが秋田にも伝わってきて喜んでいました。昨年の7月14日秋田に来たときにはそろそろ大学を離れ、健康づくりの運動や、妻を助け悠愛会の運営に力を注ぎたいと熱っぽく話し、山形に帰って行きました。

その大島君がこんなに早く逝ってしまうとは思ってもよらないことでした。こうして君は写真になりお骨となって祭壇におり、私がこちらに居るのが未だ信じられず、運命の不条理に怒りとも哀しみとも言えない感情が心の中をいっぱいにしています。大島君は他人のことは人一倍心配し、あれこれマメに動き回るのに、自分のことでは他人に気を使わせまいと、病気の事も周りには知らせてくれるなどご家族にも言っており、そんなことで今回の急なご逝去の知らせに驚いている方も多かったと思います。

今日は大島君らしいお別れの会を、と思いますが、そうかといってそう型破りのことも出来ません。出来るだ

け多くの方に思い出を語っていただきたいと考え、14名の方にお別れの言葉をお願いしました。聞きながらそれぞれの大島君と過ごした時と自分の人生を振り返っていただきたいと思います。喪主の扶美夫人の希望により祭壇には彼が一生懸命作った野菜を供えました。組織と言ひ、人と言ひ、野菜と言ひ彼は「育てること」が大好きで、情熱を注いだのですね。献奏には好きだった「夜空のトランペット」をお願いしました。最後には大島君の愛唱歌だった「ともしび」を心を込めてみんなで合唱して彼を送りたいと思います。

思い返せば先週の日曜日の今頃は、大島君が午後5時30分に向かって、ご家族に見守られながら最後の命の時を刻んでいたのです。

あれから一週間経ちました。

釈 超空（折口信夫）が「アララギ」以来の友古泉千樞の死を悼んで詠んだ歌の中にこんなのがあります。

「なき人の 今日、七日になりぬらむ。 遇ふ人も、あふ人も みな、旅びと」 親友の死に逢って、普段何気なく見過ごし、通り過ぎていた人たちがみな旅びととして見えてきた、という心情を表している、実に味わいのある歌です。

これからのひととき、大島義彦という希有なる個性を持ち、純なる魂を持ったひとりの男。62年の人生の旅の中でふれあい、関わり合った参会者それぞれの時を思い起こし、故人のご冥福を祈っていただければ幸いです。

以上葬儀委員長としての挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

お別れの言葉

山形県副知事
社団法人山形県スポーツ振興21世紀協会理事長 金森義弘

本日、ここに前山形県立保健医療大学教授 故大島義彦先生の追悼の式がとり行われるにあたり、謹んで哀悼の意を表しお別れの言葉を申し上げます。

大島先生におかれましては、新潟大学医学部を御卒業後、昭和54年新潟大学医学部附属病院の整形外科講師から山形大学医学部整形外科助教授に赴任され、その後十数年、山形大学で御活躍されておられました。本県が、平成9年、地域の保健医療サービスの向上のため、県立保健医療短期大学を設立するにあたり、山形大学医学部看護学科教授から、短期大学理学療法学科の教授、学科長といたしまして、お招きをいたしました。

そして、平成12年、県は、高度化し、専門化する医療・保健サービスに対応できる高度な知識・技術と豊かな人間性を備えた保健医療職を育成するため、新たに四年制大学として、県立保健医療大学を開学いたしました。大島先生には、引き続き、理学療法学科長として就任いただき、大学運営の基盤作りに、御尽力を賜りました。短期大学及び大学の授業では、先生の御専門を生かされ、リハビリテーション理論やスポーツ医科学の授業等を担当していただき、本学の教育研究の発展に尽くされた功績は、広く知られるところであり、今日の礎石を築かれたご苦労に対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

また、学生に対する指導とともに、各方面で実践的な活動をなされて御活躍いただいたことは記憶に新しいところであり、特に、スポーツ分野に大変情熱を注がれ、スポーツ医科学の第一人者として、本県競技スポーツの向上に多大なる御尽力をされました。先生は、山形県スポーツ振興審議会の委員を長く務められたほか、本県唯一のプロサッカーチーム モンテディオ山形を運営しております山形県スポーツ振興21世紀協会理事、山形県競技スポーツ戦略会議委員、県スポーツ医科学推進会議委員、山形県トレーナー協会会長など多くの要職にあり、卓越した識見と行動力により、本県のスポーツ界の活性化に寄与されましたことは、私どもの等しく知るところであり、平成14年3月、山形県スポーツ振興計画が出来上がりましたのも、先生のお力によるものといっても過言ではありません。

秋の国民体育大会におきましては、県の帯同ドクターとして、選手を一生懸命にサポートしていただいていた在りし日の先生のお姿が思い浮かべられます。先生の献身的なバックアップがあったからこそ、これまで本県が優秀なる成績を収めることができたものと思っております。

また、競技スポーツの向上のみならず、NPO法人「ライフサポート協会」の代表として、健康・スポーツの普及活動等を通して、地域住民の生活向上にも力を注がれました。

これからも、大学や本県スポーツの振興のために御活躍いただきますことを信じておりましたので、先生のご

逝去は惜しみてなお余りあり、痛恨の思い誠に深いものがあります。

現在、県では、高度専門職業人の養成や今後の地域課題に対応した研究開発や、次代を担う人材を育成するため、県立保健医療大学の大学院開学に向けて準備を進めております。先生が力を注がれた大学の今後の発展と本県スポーツ界の明日をこれからも見守っていただきたいと思っております。

今、御家族の皆様の悲しみはいかばかりかとお察しいたしますが、先生の教育やスポーツ医科学にかけられた情熱、御遺志を継いでいただき、この悲しみを乗り越えられ、お元気で御活躍いただくことを祈念いたします。

終わりに、生前のご功績をたたえ、安らかな永久の眠りをお祈り申し上げますとともに、私自身、公私共に故大島義彦先生を始め、医療法人悠愛会大島理事長先生にも大変お世話になりましたことを重ねて御礼申し上げます、お別れの言葉といたします。

平成15年9月14日

お別れの言葉

山形県立保健医療大学学長 廣井正彦

大島先生、こんなに早く君とお別れするなんて夢にも思っておりませんでした。今日ここに君の遺影に直面し、お別れの言葉を述べる事は、君の長年の友人の一人として誠に痛恨の極みであります。

そこで少し君のことを回顧してみたいと思っております。

君はインターン闘争からはじまった大学紛争の激しい昭和41年3月、新潟大学医学部を卒業しました。当時外国から帰国した私にとって従来の価値観を否定するようなすさまじいものに感じたものでした。君は正義感が強く、多くの仲間から信頼が厚いために紛争の真只中で多少の誤解もたれたようでしたが、母校の整形外科教室で頭角を表わし、助手、講師と進み、昭和54年先輩の山形大学整形外科渡辺教授の助教授として請われて山形にまいり、再び私達と会い、共に勉学する機会に恵まれたわけでありました。

君との思い出の一つに山形大学医学部と中国の医科大学との姉妹大学の締結に、当時の小池医学部長らと一緒に上海第二医科大学と浙江医科大学に行った事がありました。浙江では、有名な西湖のまわりを朝早く君と二人で宿舎をぬけ出して自転車であわたり、中国の素晴らしさを堪能したものでした。上海ではガイドブックを片手に上海風呂にも出かけました。

「何事も好奇心を失わないことは、学問する者に重要だ」などと理屈をいって上海の夜の町を散歩しました。上海風呂であかすりをしてもらっている時に君の上腹部の手術の痕がある事に気づくと、新潟大学勤務時代胃潰瘍で手術をした事があるといっていたのが改めて思い出されます。

平成8年山形大学の看護学科の教授となり、更に平成9年県立保健医療短期大学の教授で、理学療法学科長に請われて移動してからはしばらくたって、夕方、私のいた産婦人科教授室に来たことがありました。今度短大が大学になるので、私に来られないかとお誘いでした。私は病院長に再任され、あと一年以上あると話した所、残念がって帰っていったことがありました。

そのことが縁で私は平成12年に県立保健医療大学にお世話になることになりました。君がここにいるということとでいろいろと教えていただきました。教授会や会議などで君の弁舌さわやかな話はある時には周囲の者に誤解を与えることもありましたが、常に問題を提起して会議をリードして来た頭脳明晰さには頭が下がる思いでした。学科長として大学や学科の運営をはかるのみならず、コロラドとの姉妹大学の締結やスポーツ医学にも積極的に取り組まれて来ました。

昨年9月ごろ病院経営の事で大学をやめるといふ噂を耳にしましたが、たしか12月始めに体調が悪いといってきました。専門の病院でよく調べてもらったらと薦めましたら眼にうっすらと涙を浮かべていたのに驚きました。

長年、臨床医として多くの患者に接してきた君としては、病状を知りつくしているだけにどんなに悩まれたことでしょうか。病院でも面会謝絶ということでお見舞いにも行けず、病状を知らず、ただただ一日も早く回復され、元気な姿でもどってくることを念じていました。しかし私達の希望と祈りも空しく、9月7日夜、君のご逝去の報を受け、わが耳を疑いました。

大島先生、君が愛した私達の県立保健医療大学は、君の意を体して、大学院設立に教職員一丸となって頑張っています。どうぞ天国でお守りください。

御家庭では立派な奥様と優れたお子様達に恵まれ、後顧の憂いもなく旅立つ事が出来た事でしょう。私たちも出来るだけ奥様を支えて行きますので、どうぞ御安心下さい。どうかやすらかに眠り下さい。

大島先生 長い間ありがとうございました。そして さようなら

平成15年9月14日

お別れの言葉

山形大学名誉教授 渡辺好博

故大島義彦教授のお別れの会に臨み、ここに改めてお礼を申し上げたいと思います。

昭和51年に始まる、山形大学医学部整形外科教室の基礎堅めの大仕事は、あなたの協力なしには不可能でした。本当に有難うございました。

発足当時の3年間は茨木邦夫助教授が協力者でした。所が3年後にそのかけがえのない人は、琉球大学の創設のために引き抜かれてしまいました。私は途方にくれました。その時茨木助教授に引けをとらないタフで、私にない大きな力を持つ人物として、あなたに後任として山形にきてほしいと懇請しました。はじめは躊躇していましたが、私の度重なる要請を最後には引き受けてくれました。本当に私は有難く胸をなでおろしました。

私が山形にどういう整形外科教室をつくらうかと考えたかといいますと、まず第一に、元気で強力な教室をつくることでした。あなたは私の願いを100%理解し、協力してくれました。後輩の指導、学生の教育に大きな成果をあげることができ、毎年たくさんの新入医局員を獲得できました。数年後には、医学部でも有数な大教室へと発展することが出来ました。手術や外来患者の数はどんどん増えました。教室の勢いはスポーツの面でも発揮されました。医学部内教室対抗野球大会でした。常にトップクラスで、何回も優勝しました。あなたはときどきピッチャーとして活躍してくれましたね。更に全国整形外科野球大会でも、準優勝1回、三位1回という素晴らしさでした。常に山形はダークホースとして注目されていました。

もう一つ。山形県の脊椎外科の確立のために、貴方はこんしんの力を尽くしてくれました。大勢の後継者を育成してくれました。そのおかげで、どれほど多くの山形県の悩める脊椎患者の方々が助けられたことでしょう。その教え子達は、皆現在大病院の脊椎外科のトップとして、山形県の各地で多くの患者さんを助けています。

この他にもたくさんの仕事例えば蔵王にスポーツ医科学研究所の設立、ドクター・ラーマンを助けてバングラデシュに山形グッパ友好病院の設立を成し遂げてくれました。いちいち取り上げていたらきりがありませんので、この席では全てを申し上げませんが、本当にたくさんの仕事をやり遂げてくれました。

あなたの遺志を引き継いで、今後も、多くの整形外科医、スポーツ医学者、リハビリテーションスタッフが山形県を初め隣接各県で活躍してくれることでしょう。

ここに多くの医療関係者たちと患者さんに代わり、厚く厚くお礼を申し上げます。本当に有難うございました。

2003年9月14日

弔 辞

済生会山形済生病院院長 浜崎 允

大島義彦先生に、こういう形でお別れの言葉を述べざるを得ないということを実に残念に思います。

先生とは昭和54年7月より山形の地で一番に仕事をさせて頂いてから24年になります。色々なことがありましたが、先生とは何かにつけ、ウマが合った様でありました。私にとって兄貴のような存在となっていました。

先生が色々起案され、私達がそれにそって仕事をしていくというパターンが多かったですね。これからは先生が考えられるであろう事を私達も考え、山形の地で、医療・福祉の場実践していきますので見守って下さい。

また、先生が患われた病気の早期発見の為、PET/CT施設を山形済生病院に建設中であります。先生の発病を知り建設を決心しました。完成したら先生のお名前を頂き、YOSHIKOメモリアルペットセンターとして、県民・市民の皆様の役に立ちたいと思っています。是非、空の上から応援して下さい。

お別れの言葉

寒河江市立病院院長 佐藤 政悦

故大島先生のご冥福を心からお祈りし、謹んでお別れの言葉を申し上げます。

私は、昭和59年に大島先生に誘われ、寒河江市立病院に赴任しました。そのころの市立病院は、まさに潰れかけの状態にありました。大島先生は、「寒河江市にはなくてはならない病院であり、一緒に頑張っている病院にしようではないか」と熱く語られました。その大島先生の情熱に共感し「やりがいありそうですね」と赴任した次第です。実際に行ってみると予想以上で、谷底に転げ落ちたような状態の病院で、とにかく患者さんが来ませんでした。しかし、大島先生は、持ち前のバイタリティとユニークな発想、そしてしっかりした医療技術で我々を指導してくださいました。次々と打ち出される改革に、ついていくのがやっとでしたが、あれよあれよという間に病院の建て直しが図られ、患者さんがどんどん増え、そして病床は60から160床に増え、今に至っています。近隣の病院と比べて、勝るとも劣らない状態になりました。これも、大島先生の「いい病院を作ろう」という情熱、そして指導力なしには到底なし得なかったものです。職員一同、先生には心から感謝申し上げますと同時に、今たとえようのない寂しさを感じています。本当にありがとうございました。

さて、この度の闘病の中で、6月末におじゃました時、大島先生は「病状が進行し痛みが激しくなった時には、持続硬膜外チューブを入れようと思っているが、そのときは是非君が入れてくれ」と言われ、私は、承知しましたと約束しておりました。そして、8月の10日先生から電話があり、翌11日にTh12とL1の間から入れさせていただきます。うまく効いてくれるか不安でしたが、側管からワンショットのマーカインを追加すると、数時間痛みが楽になり、「笑顔が戻るよ。ありがとうね」とおっしゃっておられました。その言葉に、思わず目頭が熱くなりました。

大島先生は、ターミナル時はモルヒネも良いが、硬膜外ブロックがよく効くよ、と身をもって実感され、これを多くの方に勧めてほしいと、最後の最後まで言っておられました。この大島先生のずっしりと重いメッセージをみなさまにお伝えし、私のお別れの言葉とさせていただきます。

大島先生、本当にありがとうございました、どうぞ安らかに眠り下さい。

平成15年9月14日

大島先生へ送る言葉

山形県立保健医療大学理学療法学科教授 伊藤 友一

先生の考案されました頸椎の手術であります大島式拡大術は、症例数が既に1,000例以上を越え山形県内では最もポピュラーに行われる手術まで成熟しました。また、日本にとどまらず中国のハルビンでも行われており300例以上の実績があると聞いております。今後は、さらにバングラデシュでも広まっていくと思います。

先生は、私たちにさまざまな手術を教えてくださいました。手術を教えてくださいました中で私にとって一番の思い出は、卒業後三年目の胸椎前方固定術であります。大学病院の手術場で手洗いを終え、手術が始まる直前にいきなりメスを持たされて、やってみなさいといわれピエロになりながら無我夢中でアプローチしたことを昨日のように覚えております。先生は、「執刀医が万一倒れてもその手術を続行できるような心構えと術者の技術を盗むように目を凝らして助手を務めなさい。」また、「今の治療に満足せず、今よりもっと良い方法がないか常に反省しなさい」とおっしゃるのが口癖でした。先生は、自分が手術をすれば短時間に終わるのを知りながら、じつと我慢をして若い医師に手術の手ほどきを教えてくださいました。また、お忙しい中、遠くの関連病院へ手術の指導に足を運んでくださいました。そのように若い医師たちにとって恵まれた環境で脊椎外科を学ぶことが出来た

ため、いつしか脊椎外科を専門とする弟子たちが数多く輩出されました。先生が残された最も大きな業績は、臨床が出来る弟子たちをたくさん作ってきたことだと思います。先生が育てた弟子たちが、さらにその下の弟子たちを育て、山形県内の脊椎疾患で苦しむ患者さん達はその恩恵を受けております。

これからも先生から教えていただいた医師としての精神を受け継ぎ、後輩たちに伝えていきたいと思っております。心よりご冥福をお祈りいたします。

平成15年9月14日

大島君を送る言葉

新潟大学医学部同級生 齋藤英彦

大島君、とうとう逝ってしまったね。

君ともう声を交わすことが出来ないかと思うと、悲しみが込み上げてきます。整形外科教室の新人だった頃、君はいろいろなことを教えてくれました。心の喜怒哀楽を表現するとき、直接「悲しい」というような言葉を使っても相手の心に響かない。別の表現で言わなければいけないと言って教えてくれました。しかし、君を失った悲しみを何と表現したらいいのですか。教えて下さい。

君が大病を患い闘病しているという知らせを受けたのが、5月中旬、居ても立ってもおられない気持ちで山形に参りました。食事も十分にとれないとのことでしたが、私にとっては前と変わらない君がそこに居てくれて一寸安心しました。しかし、何の手助けもできない自分にもどかしさを覚えつつ帰って参りました。毎日の日常診療の合間にも君がどうしているだろうかと、君の顔が目浮かんできました。

心の中ではいつかこの日が来るのを覚悟はしておりましたが、寂しさを禁じ得ません。同級生とはいえいつも兄貴分としてアドバイスや指導をしてくださいました。また、君の周りにいた素晴らしい人たちの仲間にも入れてくれました。君は私の人間としての人格形成や医師としての成長に大変重要な影響を与えてくれました。遠く離れていても、長い間会わなくても、いつも私の心の支えになってくれていました。

「齋藤の言動をみているとはらはらせられるよ！」と言っていましたね。でも、君は世の中の不正や不条理に常に目を向け、それを正さんとする強い意志をもって行動を起こしてきましたね。ときには「常識」を非常識とする君の価値観には驚かされることがよくありました。私には君の方がもっと心配でした。しかし、君はいつも人懐こい笑みを浮かべて、辛抱強く相手を説得し君の主張の理解者にしていましたね。君の考えは、君が教えた後輩達や学生達によって受け継がれていくでしょう。

お互いに整形外科医として駆け出しだった頃、君が指導してくれた私の論文、「瘻性斜頸の治療における心理的アプローチの重要性」には君の人間愛の教えが詰まっているように思います。患者の悲しみや不安が原因となるこの疾患の治療を通して、患者と真正面から向き合い、患者の心の動きを感じながら、患者の不安や心の葛藤を解決に導いてやるという今日問われている「患者と医師のあり方」を教えてくれたのだと思います。私は今でもその教えを実践しています。その意味で、この論文は君が逝ってしまった今も、君と私の心をつなぐ大切な宝ものです。

大島君、40年以上もの間、友人としてつきあってくれて本当にありがとう、安らかに眠って下さい。

平成15年9月14日

大島君を送る言葉

新潟大学医学部41年卒同級生 木村啓一

大島義彦君、我々が新潟大学医学部に入学した昭和35年は、あの激しい安保闘争の最中でした。集会が開かれ、オルグが教室を訪れ、ピラがまかれ、街にはデモ隊がくり出していました。我々は何か得体の知れない熱気につき動かされて、講義をポイコットして、デモに参加したこともありました。そしてあの日、東大生樺美智子が国の暴力の前に倒れた日、我々は絶句して立ちつくしました。

安保闘争が終焉し、学内が虚脱の中にある時でも君は意気軒昂でした。ふってわいた様な学費値上げに反対

し、剛腕でならした医学部長と丁々発止とわたり合ったのも君でした。新聞研究会という会を一人で立ち上げ、全国のミニコミ紙から記事を集めて台紙に貼り廊下にはり出したこともありました。

我々が専門三年生の時からインターン斗争が始まりました。当初はあまりにひどいインターン生の生活改善を求める斗争でしたが、我々が専門四年生、最終学年になった時には、制度改善の要求斗争の限界を指摘する声が大きくなり、全国41大学で、改善より廃止への流れが加速し、制度廃止を実現させるための手段として医師国家試験ボイコットの方針が急浮上し、我々も、いやおうなく、その渦中に投げこまれました。我々執行部は、君の下宿先である「あかしや荘」で連日、連夜議論しました。夜が白らみかけるまで激論したのは一度や二度ではありませんでした。いよいよ大づめとなり国試ボイコットの賛否を投票することになり、クラス全員の3分の2以上の賛成をかうじてとれた時には、執行部全員疲労の極にありました。しかし、国試ボイコットはすんなりとはいきませんでしたね。国家試験のための必須科目である公衆衛生の実習を受ける人が一人二人と増えていったのです。国試ボイコットは風前の灯となりました。どう対処するのか、執行部は真二つに割れました。実習に参加した同級生をクラス会から除名し、残ったものだけで国試ボイコットに突入するという第一案と、こゝは涙をのんで、全員で実習を受け、皆んなが同一の立場に立ってもう一度、国試ボイコットを検討するという第二案がありましたね。当時君は第二案でした。そして第二案が執行部の方針となりました。公衆衛生の実習の終了した日、場所は保健所。クラスの80数名の全体会議が開かれました。議論は大づめとなり、決をとることになりました。まず、国試ボイコットに賛成あるいは反対、どちらに決まっても3分の2以上の賛同を得た方針に全員が従えるかが問われました。その時、どちらに決まろうと、その方針には従わないーという一名が退場し、その後の決議で国試ボイコット賛成が3分の2を越え、はじめて学年の統一見解となりました。その時は、賛成したのも反対したのも共にその結果に満足し皆んなで大きな拍手で会をしめくくったのでした。その後、全国の大学でも次々に方針が決定され46大学、足並みをそろえて国試ボイコットになだれこんで行ったのでした。

新潟での国試ボイコットの揺籃となった、当時の君の下宿「あかしや荘」は今も新潟の浜近く、ニセアカシヤの林の中にひっそりと立っています。

次に問題になったのは、国試ボイコット後の80数名の同級生の生活保障でした。“医師”にならない卒業生の生活保障という難題にも君はひるみませんでした。各科の教授を訪づれ、運動の主旨を説明して協力を得ることが出来たのです。先輩医師の管理下での研修という名目でした。教授の紹介状を持って県内の病院をまわり、一人月平均2万5千円、約80人分の生活保障費を確保した時は、さすがの君にも疲労の色がみえました。あけて昭和42年4月、我々は国試ボイコット集団、青年医師連合ーいわゆるー青医連として病院の一角に部屋を確保し、青医連室とし、研修を自己管理し、医局との正式交渉を行いました。この年でしたネ、生涯の良き伴侶を得たのは、扶美夫人との結婚は、同級生が媒酌人、人前での結婚式でした。

あれから30数年の歳月が流れました。

君は議論していて、劣勢になると、白い歯をみせて「今まで言ったこと全部ウソ」等とおどけて言うことがありました。理論を越えた実践が君の信条でした。そんな君はおゝいなる現実主義者でゆうゆうとした人生観を生きて来たと思っていました。しかしこの8月、君の自宅のベッドに近づいた時、君のいた部屋には若かりし学生時代と同じ匂い、同じ雰囲気、同じ風が流れていたのです。志ざし高く夢を求めてやまなかった若かりし日のそのまゝの君がいたのです、君こそが学生時代の夢を一途に、わきめもふらずに追いかけて来たおゝいなる理想主義者であることに気付いたのです。しかし僕の出来たことは、君がさし出した手を万感の思いをこめて握りかえずだけでした。

僕は君と青春のたゞ中で、故なくめぐりあったのです、だからこそ又君といつかどこかで故なくめぐり合うことが出来るのではと夢みているのです。

そして今、君と一緒に声を張り上げて歌った、あの歌「心さわぐ青春の歌」の一節が心の中で響き続けています。

平成15年9月14日

お別れのことば

NPOライフサポート協会副理事長 浅井 武
山形大学教育学部助教授

つつしんで大島義彦先生のご逝去を悼み、NPOライフサポート協会を代表してお別れのことばを述べさせていただきます。

我々メンバーが先生のご容体が芳しくないとお聞きしましたのは、今年に入ってからでした。しかし、その後も、時折、我々の活動に実際に足を運んで、あるいはお電話でご指導頂いておりましたので、突然の先生のご逝去が、本当に信じられない気持ちです。今思いますと、昨年末に行われました「子供のスポーツフォーラム」時には、すでに体調の変調があったかと推察されますが、先生は我々に微塵もそれを感じさせることなく、いつものように陣頭指揮で「フォーラム」を大成功に導いて下さいました。あまりにも崇高な自己犠牲の精神を、身をもってお示しになり、深い感銘と感謝の念で一杯であります。

我々メンバー一同は、今後一層奮起して、先生の理想や構想の具現化に向かって努力していく決意を固めております。先生、どうぞこれからも我々をお導き下さい。我々もいつも先生がおそばにいて下さると信じております。

先生の子どもや弱者に対する暖かいまなざしを決して忘れることなく、先生のご遺志を我々が継いでいくことをお誓いしてお別れのことばとさせていただきます。

平成15年9月14日

大島先生へ送る言葉

元山形大学医学部看護学科地域看護学講座 佐々木 明子
東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科教授

大島 義彦先生

大島先生は、私が平成8年に山形大学医学部看護学科地域看護学講座で勤務していた際、教授として同じ講座に就任されておりました。当時の上司の先生であります。それ以来、いつもお元気で機敏に行動するお姿を拝見していましたので、先生が新たな世界に旅立たれましたことを、信じられない思いでいっぱいです。

山形大学医学部看護学科での大島先生のお姿を振り返ってみますと、学生からは、とても頼りにされ、憧れられる存在でした。当時の医学部キャンパスマニュアルに、大島先生のことを学生が「先生はダンディで、話は面白いし、先生がお父さんだったらと何度思ったことか」と書いていたことを、よく覚えております。外見の格好良さばかりでなく、とても気さくでどの学生に対しても分け隔てなく接し、学生が挨拶すると気軽に声をかけ、親しみの持てる先生でした。普段の授業場面においても、学生の質問や疑問にはひとつひとつ丁寧に答えられており、学生からは大変頼りにされている存在でした。

学生の教育・研究に関しては、大島先生のこれまでの深いご見識から、すべて教え込むのではなく、学生自身が自ら考え学ぶ力を身につけるようにするのが本当の教育であるとのポリシーをお持ちで、授業でもそれを常に実践されておられました。

大島先生は学生とお話をされているときは、いつも嬉しそうで、笑顔で学生に熱き思いを語っているお姿が印象に残っております。

大島先生は、学生だけではなく、私たち教官にとっても同様に大きな存在でした。先生は、お仕事をはじめ、その他人生全般にわたり、広い知見とリベラルな見識をお持ちでした。また、そのフットワークのよさで、私たちの中では、仕事を始めとして、困ったときにいつでも頼りになるスーパーマン的存在でした。また、温かいお人柄と柔軟なお考えと行動力をお持ちで、私たち教官は先生を心から信頼しておりました。

日々の活動において大島先生は、山形大学看護学科の発展のために、大学と地域の関係機関との連携に力を尽くしてくださいました。

当時開設してまだ日が浅い看護学科の学生が初めて地域看護学実習を開始するに当たり、これまでの大島先生の山形県内での活動の実績をもとに、教授である先生みずから車のハンドルを握って、県内の各保健所等に挨拶に出向いてくださり、大変心強さを感じたことをおぼえています。また、実習だけではなく、地域保健活動においても、寒河江市の住民保健診査では、自ら健診の指揮をとり、学生や諸先生方を総動員して一隊となり活動さ

れ、地域住民主体の活動は何かを身をもって教えて下さいました。

このように、大島先生と御一緒にお仕事をさせていただいたことを通して、私たちは、先生の理想とする学生の考える力と主体性を重視した教育や研究に対する姿勢、住民の真に求めるニーズに沿ったサービスを提供する姿勢の大切さ、人と人との連携を大切にして、保健医療サービスを提供することの重要性など、いろいろなことを教えていただいたと思います。

私たちにとって大変頼りになる存在であり、心から尊敬していました大島先生が新たな世界に旅立たれましたことは、とても残念で、私たちは深い悲しみに浸っております。でも、大島先生とご一緒にお仕事をさせていただき過程で、大島先生の教えを沢山の“贈り物”として私たちに残してくださいました。それらは、私たちの今後の生き方を支える大きな財産となっております。

私たちは大島先生の教えを引き継ぎ、今後も先生のように常に前向きに誠実に歩んでいきたいと思っております。

大島先生、どうぞ、これからも新たな世界から私たちを見守り、そして先生の理想とされた活動ができますように、私たちをお導きください。

最後に大島先生に、もうひとつ、心から感謝したいことがあります。大島先生は、私たちに、高齢者医療の実践に深いご見識をもつ先生の奥様の扶美先生、ご家族の方々、関連の諸先生方、バングラデシュやスウェーデンをはじめとする外国の方々など、多くの人々をつなぐ架け橋を作ってくださいました。今後も大島先生が築いてくださった架け橋を大切に、先生が目指していた地域における高齢者保健医療のさらなる発展に力を尽くしていきたいと思っています。

大島先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

平成15年9月14日

大島先生へ送ることば

山形県立保健医療大学作業療法学科学生 齊 藤 寛

突然の出来事でとても驚きました。今後もご指導していただきたかったと思っていたのですが、とても残念です。

先日、突然ご自宅にうかがったにもかかわらず、大島先生は以前のように明るく接して下さいました。会えただけでもうれしかったのですが、先生は色々な話しをして下さった事、本当に感謝しています。

大島先生の話しは、今後の自分にとってとてもためになるお話でした。これからの医療について、私たちの将来について、また今の自分を見つめ直すきっかけになるお話しを熱心して下さいました。

私は、1年間という短い期間しか、先生から学ぶことができませんでしたが、とても大きな影響をいただきました。

本当にありがとうございます。

今後、社会、医療現場に出たときに先生から学んだことを生かせるように努力していきたいと思えます。

生徒一同、心からのご冥福をお祈り致します。

平成15年 山形県立保健医療大学生徒一同

先生から学んだことを生かしてゆきたい

山形県立保健医療大学理学療法学科学生 葛 西 弘 典

先生に初めてお会いしたのは、1年前の春でした。

先生は、とても素敵なお顔ではじめて教室に入ってもらって……一瞬で先生のことがとても好きになってしまったというか、とても印象に残ってしまいました。一瞬で……。

その後、先生は色々な授業の中で、勉強そのものにおける生徒の自主的な学ぶ態度、そして物を考えるという

ことの根本の大切さを教えて下さいました。考えるということ自体が、生きていることそのものだというふうに、生徒は受け止めていると思います。先生の授業を聴けなくなるのが、本当に心から残念ですが、先生から学んだことは、今後に必ず生かしてゆきたい、という思いです。

本当にありがとうございました。

先生お世話になりました

医療法人社団悠愛会大島医院 齋藤 康子

先生21年間、本当にお世話になりました。

昨年12月14日、先生のご病気のことを先生からお聞きして、びっくりして私は何も答えることができませんでした。

こんなに早くお別れすることは、夢にも思っておりませんでした。

先生からは色んなことを教えていただきました。でもまだまだ御指導をと思っておりましたが……。

先生御苦労様でした。

先生安らかにお休み下さい。

私達も微力ですが、悠愛会の為に力をつくして参ります。どうぞこれからも私達を温かく見守っていただきたいと思います。

先生、大島医院の屋上には色んな果物がいっぱいあります。野菜もあります。これを皆んな、職員で見守っていきたいと思います。キウイフルーツも、そろそろ11月になると食べ頃だと思うので、職員一同で、もいで、それで、皆で先生の思い出にひたりたいと思います。

大島先生が遺したことを、私達はやっていきます

山形ダッカ友好病院院長 エクラスル・ラーマン

先生が病気であると分っていましたが、私は、こんなに早くバングラデシュから来なければならぬなんて全然思いませんでした。

先生はバングラデシュの為にいっぱい働きました。先生が亡くなられた事を、私は、今月8日、他の病院で脊髄の患者さんを診た後、車で山形ダッカ友好病院に向かい、到着した時に、携帯電話で聞きました。

1991年10月、初めて私は先生と会いました。渡辺教授室で会いました。その後、すぐにOpe室に連れてゆかれました。

その時、Ope室の中で、先生はこう言っていました。バングラデシュで、脊髄の手術をしましたかと。その時は、脊髄の手術を整形外科の先生がするというのを全然、分かりませんでした。それで、バングラデシュでは、整形外科の先生は脊髄の手術はやりませんと言いました。その時、先生は言っていました。じゃあラーマン、バングラデシュで、初めて脊髄の手術をする整形外科の先生をやって下さいと。その後も、ズーッと言っていました。「ラーマンは、まず自分（大島先生）のコピーになって、バングラデシュに戻って下さい。」と。

先生、私は、本当は、バングラデシュに帰ろうとは思っていませんでした。本当は、アメリカかどこかの国へ行くつもりでした。

でも先生は自分の気持で心を込めてこう言っていました。「ラーマン、バングラデシュに行って同じ様に自分のコピーとなる医者をつくって下さい。そして自分の国の為に働いて下さい。」と。

そのことを、私の父に言いましたら、私の父も、ぜひ、国に戻ってきてその仕事をやって下さいと言っていました。その時、先生は言っていました。「じゃあラーマン、バングラデシュに一つ病院をプレゼントしましょう。」と。

先生は、バングラデシュの為に、たくさん色々な事を考えてくれました。そして山形・ダッカ友好病院も造りました。

1996年、病院を造る前の年、大島先生、浜崎院長先生、佐本先生と皆と一緒にバングラデシュに行った時に、色々な仕事をしました。

最初に、ダッカ大学の整形外科の教授に会いました。そこでも言っていました。「先生は自分のコピーを作ってください。まず下の医者に教えて下さい。そして次に下の学生にも教えて下さい。教えられた医者は、次々に自分のコピーを、まわりの医者に作って下さい。そうすれば、私達は、もっともっと良い仕事ができます。」と。

私は学生から教えられるなら、大変良い勉強になります。それが一番うれしい。そのことを皆で喜んで聴きました。

その位の、それ程の先生は世界中どこにも居ません。大島先生以外に全然いません。大島先生が言うとおりに私も、私達も、その仕事をしたい。

先生は山形ダッカ友好病院の中でも、他の先生に言っていました。「医者として、患者さんの為に、患者さんの気持ちになって、どんな治療を受けたいか、どんな生活をしたいかを考えて患者さんに仕事をして下さい。患者さんの治療をして下さい。」と。

本当に、どうやったら人間は元気になれるのか、どうやったら人間を助けられるのか、先生はいっぱい考えました。先生はバングラデシュの貧しい人々の為にいっぱい考えました。

1996年佐本先生と浜崎先生と一緒にバングラデシュに行った時に、先生は言っていました。この貧しい人々は、どうやって生きているのか、この孤児達はどうやって生きているのか。孤児院はありますか。私は全然考えていませんでした。

でも私達は孤児院を造りました。そこの孤児院の子供達は、そのうちに育ってゆきます。先生の仕事は素晴らしい。ほんとうにありがとう。

このバングラデシュの先生が、こんなに早く亡くなり、こんなに早く私達から離れることは全然思いませんでした。

先生が遺したこと、それを私達はやっていきます。先生、先生の体は私達から離れていますけど、先生の心は、先生の仕事は私達の心の中に生きています。その子供達も、お祈りしています。先生の為に。

先生は、バングラデシュの山形ダッカ友好病院が発展する為に色々考えました。最後まで、電話でも先生は言っていました。「ラーマン心配ない。これからも、山形ダッカ友好病院は発展する。」と、そのことを言っていました。

先生、夜中、夜遅くなっても私はバングラデシュから患者さんのことについて色々なアドバイスをもらいました。本当にありがとうございました。

先生、ズーッと自然に寝て下さい。

追 加

大島先生は、バングラデシュの山形ダッカ友好病院をつくる為に、いっぱい働きました。バングラデシュの若い医者をつくる為に、バングラデシュの患者さんに良い治療をする為に、いっぱい仕事をしました。それで私は浜崎院長先生に話をしました。

これからは、山形ダッカ友好病院のOpe室の名前を、ヨシヒコ オオシマメモリアル手術室とします。

喪主あいさつ

医療法人社団悠愛会理事長 大 島 扶 美

立って見つ 寝て見つ 蚊帳^{かや}の広さかな、加賀の千代女殿が亡き夫を偲んで唱いあげたこの心境を、私は深く理解できるようになってしまいました。

主人大島義彦がかもし出す動く音が無くなってしまったということがこれ程わびしいものかと、今さらながらおどろいております。

本日は、連休で御多用の中、故 大島義彦とのお別れの為に、この様に多勢の皆様においでいただき、御芳志、御献花、厚い御友情を賜りまして、本当にありがとうございました。心から御礼申し上げます。

別れをおしんで下さる方々に囲まれて、主人は本当に果報者と存じます。

様々な分野で主人が御親交をいただき、新たな、時にはユニークな道が開かれようとしていること、そして皆様が本当に真剣に取り組んでおられること、困難であるかも知れませんが、より良いものを目指して努力して下

さっている事が、熱く伝わってまいりました。主人がまいた種が芽をふき、花開く様、努力することが、私の役目と認識いたしました。

私の心の中にできてしまった白い大きな空間に、新しい血潮が流れ込んできました。明日から、私はもちろん、私共親族一同、法人社員一同、皆様の御友情、御芳志をありがたく受け止め、この悲しみを乗り越え、しっかり生きて参ります。故人同様に今後共、よろしくご厚宜の程、お願い申し上げます。

主人の病気は上行結腸癌で、すでに、肝臓や腹膜に転移のある末期癌でした。それを最初に発見したのは、主人自身でした。

整形外科の恩師皆川泓義先生がすでに白血病で他界されております。かつて一緒に脊椎疾患医療の向上を目指して、たくさん放射線を浴びてしまう仕事に従事したことがありました。「くるものが来た。」とおどろく程、さわやかに、病気を受け入れ、残された時間をいかに有効に使うかを真剣に考えておりました。

かつて、主人は、24時間を72時間にも匹敵するような多忙なスケジュールで、医師と農業と教官、スポーツを貫き通してきました。特筆すべきことは、自分ができる手術や手技は、自分では決して行わず、若い人達やバングラデシュなどでは、現地のドクターやパラメディカルスタッフ達に行わせる。それが指導者としての主人のモットーでした。主人のまわりには素晴らしいドクター、教官、看護師、理学作業療法士、NPO法人ライフサポート協会の皆様方等々数えきれない程の人々が居り、それぞれの人々が素晴らしい活躍をしておられます。自分は、充分色々な事をしてきた、自分の人生に満足している、悔いはないと申していました。

ただ一つだけ、主人が私に漏らした願いがありました。私も主人も共に超多忙な生活を続けてきました。新婚旅行に行くひまもありませんでした。残り少ない日々を、可能な限り一緒にいてほしいということでした。病気が私達夫婦にはじめて夫婦としての時間をもたらしてくれました。

主治医瀬尾伸夫先生にとても深い御理解をいただきました。そして、末期癌の在宅ケアという至難のわざをやったのけました。そして、その大切さが分かりました。癌性疼痛に対して麻薬だけでなく佐藤政悦先生に行っていた持続硬膜外ブロックの有効性を身をもって証明しました。

医師として、主人の癌を早期発見できなかった私は実に無念です。二度とこの悲劇をくり返さない為に、浜崎允山形済生病院の院長は、山形でははじめて、PET (ペット)/CTを導入して下さることを決意されました。早期癌発見の決め手となる、目の玉が飛び出る程高価な医療機械です。そして、検査費用も高価です、しかし命にはかえられません。浜崎先生の決意に感謝致します。

この度、私はもちろんですが、故人に対して皆様から賜りました御芳志からも、このPET/CT購入の為に御寄付をさせていただく所存です。

故人は病气療養中の7月30日に「こどものスポーツ医学入門」と題する本を監修発行致しました。僭越ながらお手元に配らせていただきました。御意見、御批判を賜りますれば幸いです。

最後に再度お集まりいただきました皆様に感謝申し上げます。そして、故人がこよなく愛したロシア民謡 ともしびを御唱和いただけましたら幸いです。

これを持ちまして喪主のあいさつとさせていただきます。

平成15年9月14日